

#### 4 徳島県立文学書道館【22,787千円】

文学・書道資料の収集・保存、調査研究に努めるとともに、その成果を展示や催し、教育普及事業などに生かし、広く県内外の人々から利用される施設となるよう魅力ある事業展開を図った。

##### (1) 顕彰、表彰事業【991千円】

	事業名	概要	経費(円)
1	第19回とくしま文学賞	<p>広く県民から文芸作品(10部門)を募集し、発表の場を提供することにより、文芸活動の活性化、県民文化の向上を図った。令和3年度は、小説28人、脚本3人、文芸評論5人、児童文学14人、随筆43人、現代詩383人、短歌288人、俳句396人、川柳157人、連句16人の計1,333人から2,074点の応募があった。各部門の入選作品は「文芸とくしま」に掲載し、当館で表彰した。</p> <p>表彰式: 令和4年2月11日(金・祝)</p> <p>応募者数: 1,333人</p> <p>応募作品数: 2,074点</p> <p>会場: ギャラリー</p>	990,735
	小計		990,735

##### (2) 年鑑編集・刊行事業【347千円】

	事業名	概要	経費(円)
1	研究紀要「水脈」18号	<p>館が所蔵する文学者や書家に関する作品や資料等の調査研究を行い、その成果を紹介するために刊行した。</p> <p>B5版サイズ 700部</p> <p>販売価格: 無料</p>	346,500
	小計		346,500

##### (3) 教育普及育成事業【3,708千円】

	事業名	概要	経費(円)
1	文学講座 大高翔の俳句教室	<p>俳人として10代から第一線で活躍する大高翔さんによる若者向けの俳句講座。新型コロナウイルス感染拡大防止のため、8月は中止し、9月はオンライン開催とした。</p> <p>日時: 令和3年5月～7月、9月(全4回)</p> <p>受講者数: 27人</p> <p>受講料: 無料</p> <p>会場: 講座室</p>	388,527
2	文学講座 芸術・文化を語る	<p>徳島ゆかりの芸術家や文化人に専門分野の話をしていただき、心豊かな社会の生き方について考える講座。新型コロナウイルス感染拡大防止のため8月はオンライン開催とした。人形浄瑠璃「徳米座」座長のマーティン・ホルマン氏、ノンフィクションライターの城戸久枝氏、詩人・吉野弘長女の久保田奈々子氏、盆栽師の平尾成志氏を迎えた講座は、いずれも専門家ならではの見識と豊富な経験に学ぶところが多く、いずれも充実したものとなった。</p> <p>日時: 令和3年6月～9月(全4回)</p> <p>受講者数: 115人</p> <p>受講料: 無料</p> <p>会場: 講座室</p>	459,271

## (3) 教育普及育成事業

	事業名	概要	経費(円)
3	文学講座 原爆朗読劇 「夏の雲は忘れない」	女優の山口果林さんらが12年にわたって上演し続け、2019年に幕を下ろした原爆朗読劇を当館が引き継ぎ、初めて上演した。迫力ある朗読に、参加者からのアンケートでは、「とても心に響き、涙がとまらなかった」「平和の大切さについて、あらためて考えさせられた」といった声が多く寄せられた。  日時:令和3年6月13日(日) 入場者数:93人 受講料:無料 会場:ギャラリー	214,640
4	第20回言の葉朗読会	開館以来、毎年開催している言の葉朗読会には、23組、総勢28人が出演した。古典、小説、随筆、翻訳本、絵本など、幅広いジャンルの作品を朗読、節目の年にふさわしい朗読会となった。参加者からは、「本の世界に引き込まれた」「素敵な本と出会えて良かった」といった声が多く寄せられた。  日時:令和3年9月23日(木・祝) 受講者数:84人 受講料:無料 会場:ギャラリー	5,780
5	文学講座 短歌を作ろう	現代短歌の秀歌を鑑賞しつつ、実作を基礎から学ぶ講座。「季節をうたう」など、各回のテーマについて理解を深めながら、経験者も初心者も共に実作を試み、短歌を作る楽しさを味わった。  日時:令和3年10月～令和4年3月(全6回) 受講者数:167人 受講料:無料 会場:講座室	166,356
6	秋の文学講演会 I	詩人、作家として数々の著作が多くの賞を受賞するほか、トークイベントや創作指導など幅広く活動を行っている小池昌代さんを招いた。普段の何気ない風景の中の言語化以前の詩的瞬間を捉えること。せわしない日常の止めどなく流れる時間を一瞬を引き止めること。自身の詩2編「あいだ」「ようこ」、および吉野弘「夕焼け」を例に、詩は私たちのすぐそばにあることを語った。  日時:令和3年10月10日(日) 受講者数:81人 受講料:無料 会場:ギャラリー	519,035
	秋の文学講演会 II	作家で、元長崎原爆資料館館長の青来有一氏を招いた。長崎への原爆投下、ナチによるホロコーストなど、キリスト教思想を背景にもつ犠牲者らは、なぜ自分たちがこういう目に遭うのか、なぜ神は自分たちを見捨てたのか、何世代にもわたって苦悶し続けた。青来氏は、旧約聖書で語られるヨブの物語から、神は自らの無力さを示すことで人間の自由を守ろうとしたこと、また、人間に促されているのは、試練を伴う峻厳な自立であることを語った。  日時:令和3年11月7日(日) 受講者数:65人 受講料:無料 会場:ギャラリー	

## (3) 教育普及育成事業

	事業名	概要	経費(円)
7	文学講座 古典を読む 「紀貫之の『土佐日記』」	紀貫之の晩年の作『土佐日記』を紐解く講座。阿波も描かれる『土佐日記』から、都会と田舎の人の違い、土佐で亡くなった娘などの主題を取り上げ、深く読み込んでいった。  日時:令和3年11月～令和4年3月(全4回) 受講者数:61人 受講料:無料 会場:講座室	93,140
8	書道講座 書道講演会 「美しい文字、美しい書」	美文字研究の第一人者として活躍する横浜国立大学教授・青山浩之氏を招いての講演会。人が美しいと感じるのはどんな文字なのか、何がその美しさの要因となっているのかをわかりやすく講演。脳内に美しい文字を入れておくこと、相手のことを思いやって書くこと、筆記具を正しく持つことなど、美しい文字を書くための「青山メソッド」を紹介した。  日時:令和3年10月24日(日) 受講者数:57人 受講料:無料 会場:ギャラリー	143,871
9	書道講座 新春 書き初め 大字に挑戦!	毎年恒例の小学生対象の講座。1年生から5年生まで12人が、伝統文化の「書き初め」にちなんで特大筆(全長46cm、穂の長さ14.5cm×穂の直径4cm)と68cm×70cmの紙を使って大字作品を制作した。はじめに書き初めの由来や、筆の持ち方、書く姿勢などを説明し、その後約1時間で、各自が書きたい漢字一字を、墨をたっぷり含んで重くなった筆で、体全体を使って揮毫した。最後には迫力のある大字作品が仕上がり、作品は1月13日から30日まで1階ロビーに展示した。  日時:令和4年1月10日(月・祝) 受講者数:21人 受講料:無料 会場:実習室、講座室	55,000
10	書道講座 書の鑑賞	書家・評論家の石川九楊氏による書の鑑賞講座。「書を見て、味わう」ために超えるべき3つの見方として、①「上手・下手と判断しない」、②「読める・読めないと悩まない」、③「美術・造形のようなものと考えない」と述べた。書の見方を得るためには、書とはどういう芸術かを知らねばならないと語り、館蔵の作品から「神」の字を3点取り上げ、画像を示しながら、「書とは、文字や文の書きぶりの表現芸術」であることを力説した。  日時:令和4年1月30日(日) 受講者数:68人 受講料:無料 会場:ギャラリー	208,189

## (3) 教育普及育成事業

	事業名	概要	経費(円)
11	書道講座 一流書家による席上揮毫	現代書壇を代表する書家が作品制作の姿を披露した。講座の前半は、自身の学書の足跡と近作を画像で紹介した。とりわけ、「倣書」と「罫線執筆法」は若い世代にもぜひ実践してほしいと話し、今も自身の書にはその技法が生かされていると述べた。講座の後半で、さまざまなサイズの紙に自作の漢詩などを揮毫。その巧みな筆使いに、受講生は見入っていた。 日時:令和4年3月6日(日) 受講者数:73人 受講料:無料 会場:ギャラリー	201,872
12	書道講座 インテリアの書を創作しよう	自分の部屋に飾りたくなるような、現代的でおしゃれな書の小作品を制作した。1回目は、講師の作品を参考に、受講者が書きたい言葉を練習した。講師に実技指導してもらいながら、葉書に岩彩で色を付けたり、作品の下地に使う布や紙の組み合わせを考えた。2回目は、揮毫した作品を額に入れて仕上げた。A4サイズから葉書程度の小作品だが、個性とセンスあふれる作品が出来上がった。 日時:令和4年3月12日、26日(全2回) 受講者数:18人 受講料:無料・材料費実費 会場:実習室	118,749
13	ことのはロビーコンサート	文学書道館の存在を知ってもらい、気軽に足を運んでもらうことを目的に開催。各回、徳島ゆかりの演奏家には、言葉や文学にまつわる曲、開催中の展覧会に関わる曲をプログラムに組み込んでもらい、文学書道館ならではの独創性を生み出している。 日時:令和3年5月～令和4年3月(全6回) 入場者数:536人 入場料:無料 会場:ロビー	1,132,616
	小計		3,707,046

## (4) 展示事業【17,743千円】

	事業名	概要	経費(円)
1	文学常設展 瀬戸内寂聴記念室  (常設展示事業)	瀬戸内寂聴の人生をたどりながら寂聴文学を紹介する記念室。京都・嵯峨野の寂庵を模した書斎や、心とさせる日本庭園を設置している。「寂聴とサガン」と題して、年1回の展示替えも行った。  期間:通年 会場:瀬戸内寂聴記念室	-
2	文学常設展 文学常設展示室  (常設展示事業)	徳島の人・場所・文化が織りなす文学回廊。徳島にゆかりの深い文学者とその作品、徳島を描いた文学作品などをさまざまな角度から感じとれる展示としている。展示室内では、文学企画展として「生誕150年 徳島文壇の開拓者 井上羽城」を開催した。 期間:通年 会場:文学常設展示室	-

## (4) 展示事業

	事業名	概要	経費(円)
3	文学常設展 収蔵展示室  (常設展示事業)	瀬戸内寂聴寄贈による日本近代女性史の貴重な研究資料など、豊富な資料を保管している収蔵庫内をガラス越しに見学できるようにしている。また、特別展に関連した展示や収蔵品を紹介する展示を行った。 期間: 通年 会場: 収蔵展示室	-
4	書道常設展 書道美術常設展示室  (常設展示事業)	徳島ゆかりの書家を中心に豊かな書の世界が広がる展示室。年3回の展示替えを行い、収蔵している豊富な作品を幅広く紹介している。本年度は「春・夏の書道収蔵品展」「中林梧竹と海老塚的伝一親交から生まれた書」「秋・冬の書道収蔵品展」を開催した。 期間: 通年 会場: 書道美術常設展示室	-
5	文学特別展 寂聴の愛する古典の女たち  (特別展示事業)	瀬戸内寂聴は学生時代から古典に親しみ、多くの現代語訳や小説化・脚本化をした作品がある。本展では著書「私の好きな古典の女たち」から額田王、六条御息所など10人を取り上げた。また、51歳で出家し、建設した「寂庵」の庭の変遷とゆかりの人々を写真と文章で紹介する「寂庵の庭とゆかりの人々」を併催した。  会期: 令和3年4月10日(土)～5月23日(日) 32日間(新型コロナウイルス感染拡大防止のため4/29～5/5は臨時休館)  入場者数: 342人 観覧料: 260円～520円 会場: 特別展示室・ギャラリー・収蔵展示室	1,726,740
6	書道特別展 小坂奇石と現代書道二十人展  (特別展示事業)	日本を代表する20人の書家が新春に新作を発表する展覧会「現代書道二十人展」。徳島県美波町出身の書家・小坂奇石(1901～91年)は56歳の時の第1回から36年間にわたり同展のメンバーに選ばれ、作品を発表した。本展では、奇石の没後30年にあたり、39点の現代書道二十人展出品作を展示した。  会期: 令和3年6月18日(金)～8月9日(月・振休) 46日間 入場者数: 1,239人 観覧料: 260円～520円 会場: 特別展示室・ギャラリー	1,892,002
7	文学特別展 モボ・モガの生みの親 新居格の仕事  (特別展示事業)	大正から戦後の混乱期に活躍した鳴門市出身の評論家・新居格(1888-1951年)。数多くの評論を発表し、モボ・モガという流行語を作りました。また、自らモダニズム文学を創作し、パール・バック「大地」を翻訳するなど、幅広く活動した新居の仕事著書や直筆原稿などとともに紹介した。  会期: 令和3年8月12日(木)～9月20日(月・祝) 35日間 入場者数: 419人 観覧料: 260円～520円 会場: 特別展示室・収蔵展示室	1,491,491

## (4) 展示事業

	事業名	概要	経費(円)
8	書道特別展 文字の美 —柳宗悦がみつめたもの  (特別展示事業)	民衆の暮らしの中で使われていたものに美を見だし、「民藝」と名付けて、その価値を広めた日本を代表する思想家・柳宗悦。本展では、柳が蒐集し、東京・駒場の日本民藝館が所蔵する拓本や経典、文字が施された絵画、陶磁器、木工品、染色品、板画家・棟方志功らの肉筆の書など86点を展示した。そのほか、柳の「書論」から書や文字の美についての考え方を要約し、柳が見つめ、たたえた“文字の美”を紹介した。 会期:令和3年10月2日(土)～11月14日(日) 38日間 入場者数:700人 観覧料:260円～520円 会場:特別展示室・書道美術常設展示室・収蔵展示室	6,525,191
9	文学特別展 中原中也—汚れっちまった悲しみに  (特別展示事業)	人間の悲しみや寂しさを、まっすぐな詩心と少年のようなまなざしで映し出した詩人・中原中也(1907-1937年)。「サーカス」「汚れっちまった悲しみに……」「一つのメルヘン」など深い叙情と澄み切った感性の結晶した詩は、多くの人々の心を慰めてきた。近代を代表する詩人の一人で、今なお愛され続ける中也の直筆原稿や日記、遺愛品などを展示し、詩人の歩みと作品世界を紹介した。  会期:令和3年12月11日(土)～ 令和4年2月12日(土) 48日間 入場者数:928人 観覧料:260円～520円 会場:特別展示室・収蔵展示室	2,661,083
10	書道特別展 江口大象 —おおらかな書の世界  (特別展示事業)	書家・江口大象(1935-2020年)は、徳島県美波町出身の小坂奇石に師事したが、若くして師風を離れ、独自の書を追求した。日展や現代書道二十人展などに作品を発表し、書道界の第一線で活躍した。また、奇石が創設した書道研究「璞社」の会長を55歳の時に引き継ぎ、多くの門人も育てた。漢字や調和体、小品から大作まで多種多様な作品群を展示し、「おおらかで明快な伸びやかさが魅力」と言われる江口大象の書の世界を紹介した。  会期:令和4年2月17日(木)～3月21日(月・祝) 29日間 入場者数:621人 観覧料:260円～520円 会場:特別展示室・ギャラリー・書道美術常設展示室	1,629,292
11	企画展 中林梧竹と海老塚的伝 —親交から生まれた書  (企画展示事業)	“明治の三筆”に挙げられる書家・中林梧竹と、横浜市生まれの実業家で梧竹の後援者だった海老塚的伝の親交がテーマの企画展。本展では、二人の関わりや、梧竹が海老塚家に滞在して制作した作品24点を制作エピソードとともに紹介。また的伝は、梧竹の死後、梧竹作品を研究・顕彰した第一人者で、1959年、徳島の梧竹愛好家との交流をきっかけに梧竹作品と関連資料合わせて約400点を縁もゆかりもない徳島県に寄贈し、それらは県有形文化財に指定された。そのいきさつや、的伝の梧竹顕彰活動を関連資料によって紹介した。 会期:令和3年6月15日(火)～9月26日(日) 90日間 入場者数:1,757人 観覧料:100円～310円 会場:書道美術常設展示室	165,117

## (4) 展示事業

	事業名	概要	経費(円)
12	文学企画展 漢字のなりたち、そのて まえのかたち—金子都 美絵 白川静文字学を 描く  (企画展示事業)	ひとつの漢字が生まれる背景には、はかり知れない悠遠な人類の記憶が刻まれている。東洋の古典や甲骨文字をはじめとした膨大な資料に日夜向き合い、3000年以上も前に漢字文化圏で生きた人々の生活や慣習、情念などを形の向こうに捉えた東洋学者・白川静。白川静文字学に出合い、そのひとつひとつを美しい絵で表した徳島育ちの画家・金子都美絵。本展ではその中からおよそ50点を解説付きで紹介した。  会期:令和3年8月12日(木)～9月20日(月・祝) 35日間 入場者数:609人 観覧料:無料 会場:ギャラリー	743,114
13	文学企画展 生誕150年 徳島文壇の 開拓者 井上羽城  (企画展示事業)	井上羽城は、福井県に生まれ、東京で文学を学んだのち、明治30年、新聞記者として徳島に来県。徳島新報(現・徳島新聞)や徳島毎日新聞(同)において文芸欄の創設と普及に努めたほか、自らも小説や詩、短歌、俳句などを発表した。その深い学識と高潔な人柄で多くの人から慕われ、徳島文壇の指導的、啓蒙的役割を果たした。本展では、生誕150年にあたり、徳島の文化と文学の発展に寄与した羽城の業績を、著作物や直筆原稿、愛用品とともに紹介した。また、羽城と交流のあった落合直文、野口雨情ら著名人たちからの書簡なども併せて展示した。  会期:令和3年11月3日(水・祝)～ 令和4年1月16日(日) 74日間 入場者数:2,531人 観覧料:100円～310円 会場:文学常設展示室	302,100
14	書道企画展 第6回 書道創作グランプリ  (企画展示事業)	小学4年生から高校生までを対象に、応募のあった679人の中から224人を予選で選考。予選通過者と招待者(グランプリ1回受賞者または準グランプリ2回受賞者)16人を対象に10月30日、31日に本選を実施した。小中学生は各学年、高校生は漢字・漢字仮名交じり・仮名の各部門でグランプリ、準グランプリ、金賞、銀賞、銅賞を決定し、11月27日から12月5日まで本選作品すべてを展示した。また準グランプリ受賞者以上を対象に12月5日に表彰式を実施した。  会期:令和3年11月27日(土)～12月5日(日) 8日間 入場者数:690人 観覧料:無料 会場:ギャラリー	606,429
	小計		17,742,559
	合計		22,786,840